



Delicate Paths - Music for Shō

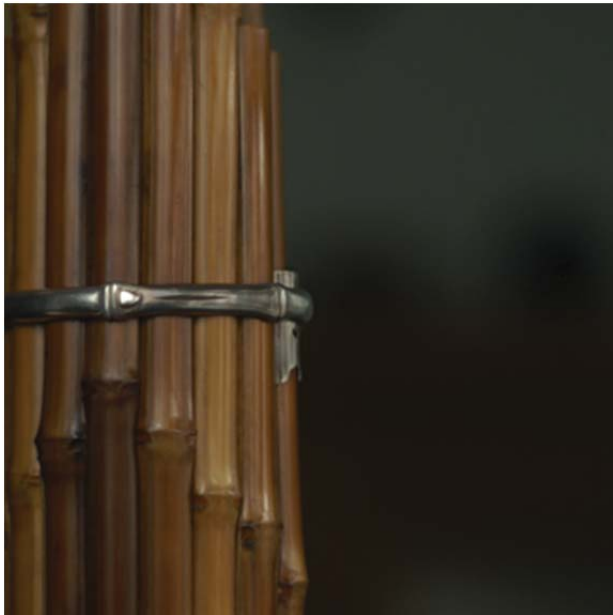
たおやかな歩み 笙の音

Sarah Peebles with Evan Parker, Nilan Perera, Suba Sankaran unsounds 42U

アーティストからのメッセージ
(unsounds 42U より)

私は日本で作曲の勉強をしていた80年代、日本の現代社会で演奏されている伝統音楽の中に、深遠な役割を持つものがあることに惹かれました。そして、日本のかつての宮廷の交響楽演奏と舞踊で用いられた、日本の「マウスオルガン」である笙（しょう）を、東京、千駄ヶ谷の小さな神社、鳩森八幡神社で学ぶ機会に恵まれました。私はこの神社で、雅楽の基本レパートリーに親しみ、結婚式などの神道の儀式で演奏し、笙の調律と修理の方法を学びました。それ以来、笙のアコースティックな拡声・再生音で遊び、即興や作曲の可能性を探り続けてきました。その中で、一体誰が「自然とテクノロジーが出逢う」こんなにすばらしい作品を思いついたのか、不思議に思ってきました。真に優雅で、シンプルに見えつつも実は複雑で、幽玄の音を奏でるこの楽器を。そしてもちろん、その答えは「誰が笙を思いついたのか」ではなく、笙が存在するにいたったその歩みにあります。

リードのない吹奏楽器である笙は、紀元前710年～794年の間に中国から日本にもたらされました。それ以前そしてそれ以来に開発されたアジアの様々な「マウスオルガン」のひとつで、宮廷、神社、寺院での儀式のための雅楽の一環を成してきました。1960年代以来、コンテンポラリーな作曲と即興作品が笙のレパートリーの一部を成すようになり、耳を引くそのパイプオルガンの音は世界中のファンを惹きつけてきました。アジアのマウスオルガンは、3000年以上前の現在のラオスに発祥した可能性が高いと考えられています。これらの楽器は私たち人間そして私たちを取り巻く生息地の間にある興味深いシナジーを映し出しています。古来マウスオルガンは、ハリを持つミツバチの親戚であり、熱帯に生息する野生のハリナシミツバチ（ラオスの *Trigona* 属など）の巣を材料として用いてきました。





世界中の熱帯地域で森の人々が用いてきたハリナシバチは、植物の樹脂（植物ゴム、油、その他の物質）を集め、それに分泌した蜜ろうをあわせて混合物を作る社会的な生き物です。ハチたちはこれらの材料を平等に組み合わせ、巣の中の建築材として使用します。熱帯の先住民たちは、何千年にもわたり、これらの材料を集め、煮詰めて特定の比率で混合し、様々な方法でマウスオルガンその他多くの文化的なアイテムに用いてきました。

古代アジアでは、養蜂と農業の発展に伴い、エコロジーと人間の文化が新しい方法で交差しました。後に笙となるマウスオルガンは、管理されたハチー最終的には、アジアミツバチの亜種である日本のミツバチ (*Apis cerana japonica*) から採取された蜜ろうに加え、人間が採取した樹脂、粉状にしたマラカイト、鉛、銅、漆を塗った木材、水牛の角、銀、古い家の炉床から取った竹を燻したものを用いました。この製法は、この楽器が日本にもたらされてから、時々「実験」がされた他は、ほとんど変わっていません。

—2014年トロントにて、サラ・ピーブルズ

笙の簧（した）、竹管、ハリナシバチは
次のページに続く

(笙の写真 pp 1-3: Robert Cruickshank)





笙の簧（した）と竹管

笙の簧（した）と呼ばれるリードは、本質的な要素です。笙の独特の音色（反響）は、燻された竹管と組み合わせた簧によって生まれます。それぞれの竹管に施された銅製の簧は、漆を塗った木の挿入物の上に置かれます。簧には湿気をコントロールするために粉状のメラカイトが塗られ、ハチの蜜ろうの混合物で接着されています。現在は、きめ細かい鉛粒を含むさらに濃密な混合物が調律に役立てられています。現在は、管理されたミツバチ（*Apis* 属）と人間が採取する樹脂が用いられていますが、これはハリナシバチの巣から採取した（CDのメッセージでも説明）蜜ろう樹脂、cerumin を使った初期のマウスオルガンから進化を遂げたものです。cerumin を作ることができるのはハリナシバチのみで、現在もいくつかのマウスオルガンの製作に用いられ、ラオスでは *maeng kisoot* と呼ばれています。



Trigona 属のハリナシバチ。ブラジル、ベレン近くの洪水に遭った森で生きている木から樹脂を採っている（下）。ハリナシバチ(*Frisionelita varia*)の巣箱の中。植物樹脂、cerumen の繊維—分泌した蜜ろうと平等な割合で混合された樹脂—。背後は幼虫の入ったゴニジアと働きバチ。ブラジル、パラナ、ベルテア。（左）。



経歴と『たおやかな歩み 笙の音』CDの詳細はこちらへ

Unsounds: unsounds 42U

(ハリナシバチとハチの巣の写真:
Giorgio Venturieri)